

日本劇作家大会2014 豊岡大会
コウノトリ新人戯曲賞 候補作品

『Bridgel』

作
西
史
夏

これは、大正十四年五月二十三日十一時十一分、城崎温泉街を襲った地震のお話です・・・

ズンと突き上げるような振動が何度かして、サヨは台所の床から跳ね飛ばされると、うつぶせに倒れた。とっさのことだったが、ねんねこでおぶった淳子あつこより先に両手で腹を守ったのは、やっぱりまた赤ん坊がでけると証拠やと、サヨは思った。月のものが来なくなると三月ほど暮れるが、端午の節句を過ぎても城崎温泉街は息つく間もない忙しさで、産婆を訪ねる事もままならなかった。サヨの背にズシンと天井がのしかかっていたのは、わけも分からずうつぶせになった後だった。こねー両手を身体の下敷きにしてもうたんは失敗やったなアと、サヨはすぐに後悔した。一瞬気が遠くなつたが、おんぎやあおんぎやあと淳子が火のように泣き出したので、サヨは意識を取り戻した。なんとしてーこっから出んならん。力いっぱい身体を動かすと、足袋をはいた両脚と首だけが自由になった。少しばかりの隙間はあるようだった。けれど、尻のあたりがぎゅうと地面に押し付けられている。亀のように首を伸ばして真っ直ぐ前を向いてみるが、いちめんの煙で何も見えない。サヨは、げほげほと咳き込んだ。土埃だった。涙で目を瞬しほたかせているうちに、また地面がズンと動いた。ミシッ、ガラガラドッスン。再び、二階建ての木造旅館の瓦や柱が引き裂かれる音がして、サヨは前に押し出された。尻に当たっていた材木がずれて両脚にのめり込み、肉と骨を砕いた。悲鳴は、既にサヨ独りのもので、赤ん坊の泣き声は聞こえなくなっていた。「淳子！淳子！」叫ぶサヨの声が、何度も空しく土埃の中に呑み込まれては消えた。

―ご新造しんぞうさん、ご新造さん。

呼ぶ声に視線を向けると、女中のミツが跪ひざまいてサヨを覗き込んでいた。昼飯に使う醤油が足らず、買いに走らせていた。

―ご新造さん、家をまるごと背負しょつとんなる。

ミツはサヨの上に乗っかかる瓦や木切れをどかしはじめた。ミツの背後で、大谿川おたがわに落ちた瓦礫がドブンドボンと水しぶきをあげた。サヨは、その下流に地蔵湯から駅前へつながる下の大橋の姿をみとめた。あの橋の上で、今朝がた船着き場へ向かう夫の満みづるを送り出した。あんなにひとつ言いた―とも言えんまんま死ぬのはごめんだで、とサヨは思った。

―ミツちゃん、淳子を出したって、背中であんだいけつとる（生きている）。

砂を飲み込みながら、サヨは叫んだ。口に出した後で、淳子はもうあかんかもしれん：と、弱気がわきあがり、背中いっぱい汗が噴き出した。淳子はよく泣く子だった。明け方から夜中まで一日中泣き通しの淳子を背負って、湯治客に出す、朝、昼、晩の飯の支度、掃除、洗濯、といった旅館の仕事をこなすのは重労働の上肩身が狭かった。隠居屋敷から顔を出せば小言をいう姑のキヌが、淳子をじっと見て、―いまのうちに泣

いとくがええ。女が好きなように泣けるのは、赤子のうちだけだ。あとは我慢、我慢じゃ。—と言ったとき、サヨは淳子が女である限り、どこへ嫁にやろうが思うままには生きられぬことを悟った。サヨ自身、毎日の暮らしの中で自分の時間を持たなかった。十六歳になる姪っ子のミツが奉公に来てから、東の間台所を任せられる隙間も出来たが、そのわずかな時間すら客の世話、家族の世話に費やされた。それでもせつせと仕事をしながら、色々なお里訛りで聞く湯治客の世間話は、サヨにとって面白かった。

山登りが趣味という九州の性病患いの男は、日本各地を旅したが、この街ほど面白くて風情のある土地はないとサヨに語った。

—風情ちゅーたら、ハア、どんなもんですかいなあ。

と、サヨが問うと、

—こげにコンコンとした薬の温泉があるうえに、海も、山も、川も、まこと美しか。魚も美味か。日本の良かところがつまっとるばい。

—へエ、わしは但馬からは出たことがないさけエ、気付きませなんだ。

—仕方なか。日本ちゅう国は山がいっぱいあるごたる。どこへ行ってもすぐにどんづまりじゃけえ、そう簡単には余所へはいけんばい。

—そらあ、広い国だ。

—せまか、せまか。あんたが、たったひと山、ふた山こえた向こう側を、勝手に遠かと思うとっただけだ。

男はそう言つて、カツカツカと豪気に笑うと、

—おかみさん、ぜひいちど来日岳くるひだけに登ってみんしゃい、円山川まるやまがわから豊岡盆地まで一望できますけん。

と、言つた。

そない高い山に女の身で登れますかいな…と、サヨは心のうちで呟いたが、来日岳とまではいかんでも、いつか自分の暮らすこの街をとつくり見下ろしてみたいもんだと、密かに思った。

その機会は意外と早く訪れた。温泉寺の開山忌に、年老いたキヌのつきそいで行くことになった。温泉街ではあまねく住人が、寺の観音菩薩を信仰していた。淳子をミツに預け、サヨは足の弱くなったキヌを支え支え、観音さん目指して大師山だいしせんの山道を登った。途中割れた石段の間に咲いた菫を一輪摘んで懐に仕舞うと、若い娘に戻ったような気がした。寺に辿り着いたサヨが溪谷を振り返ると、大谿川を中心に左右の山と山の間にこびりつくように無数の小さな旅館群がみえた。のびやかに流れる大谿川の向こうに円山川、そしてその先には日本海の海が広がっていた。

—美しいのう。

サヨは思わず呟いた。

美しい、という不慣れな言葉を口にしたことに頬が赤らんだが、サヨの心は華やいだ。城崎ちゅう街は、石の割れ目に咲いた菫のようだ、とサヨは思った。

ひょつくらすつとこの揺れは来日岳が爆発したんだらアか、サヨは思っ

た。そうだ、きつとそうだらア。二年前に東京で何万人も死ぬ大きな地震があったけれど、西のほうは安全だと、えらい役人さんが言うとなつた。ほしたら、いまごろ玄武洞に行った満さんら男衆おこしどもはどうなつとるだらアか。あすこは円山川をはさんだ向こう側にあるで、ここいらよりはまして助かつとるかもしれん。ちゆうことは、一緒に行った芸者も助かつとるちゆうことだで、あの女むと：あの女の人も、一緒くたに助かつとるちゆうわけだ。：わしは、あの女に会った晩のことが今でも忘れられん。淳子が熱を出してどうにもこうにも豊岡の病院へ連れて行くしかならんようになって、金を貰いに満さんが顔を出しとるちゆう置屋を訪ねて行きよつた。わしは帳簿をせいらいつけるだけで、金は全部満さんの懐だで。満さんが出て来る前に、嫌じゃ嫌じゃと、だだをこねる女の声を聞いた。わしは嫁に来てからこの方、満さんにも、しゆうとめさまにも、嫌じゃなどというて逆ろうたことはない。女をなだめすかしながら満さんは玄関先まで来て、淳子を背たろうたわしに金を渡した。そのときあん人はわしになんて言つた。―恥かかしよつて、あはたれ(あはたれ)が。―そう言うたんだで。わしは恥ずかしゆうなつて、すぐに置屋を出ていったわいな。あの女はわしより、もしかすつと満さんより年上に見えたが、着飾つた姿は品があつて美しかった。満さんはあの女を見ながら、―美しいのう。―と、やっぱり呟くんだらアか。満さんがなんぼたつてもわしにいけずなは、あの女が好きなせいなんだらアか。それをわしは、一生かけて満さんに聞いてみるつもりやつたのに。

カーン、カーン。

サヨは、遠くから火事を知らせる鐘が鳴つた気がした。足の裏の奥の方から熱気がむせてくる心配がした。

サヨも、ミツも、助けてくれる男が来ないことを知つていた。今日、芸者を引き連れた街の男たちがこぞつて玄武洞へ出掛けたのは、「城崎節」という新しい宣伝歌を広告するための接待だつた。そう簡単には遊覧からは戻れまい。街には、温泉街の日常を支える女たちしか残つていなくなつた。

パチパチと火のはぜる音を聞いたサヨは、悲鳴をあげそうな熱さとともに、それが錯覚でない事を確信した。

―ミツちゃん、もう、あんた一人で行けつちや。

口にしかけたその時、ミツの幼い手がサヨの身体に触れ、ミツは渾身の力で一気にサヨの背にのしかかつて一枚板を抜き取つた。そしてサヨは、ミツの手がぼろぼろに引き裂かれた淳子のねんこを抱き取つたのを見た。しかし、淳子はだんまりだつた。

―淳子、泣かんか！

サヨは叫んだ。

―ミツちゃん、ほべた(ほつぺた)を思いきりたたこんだで！

はつとしてミツは、淳子の顔を叩いた。何度も何度も繰り返すうちに、やがて：おんぎゃあ、おんぎゃあと、息を吹き返すように淳子が泣きだした。

ミツはサヨを見ると、おそれるような顔をして後ずさり、
—もうアカン…
と、だけ言った。

サヨの後ろで渦巻く火が、ミツの瞳のなかでもとぐろを巻いていた。ミツは、「ご新造さん、すんまへん、すんまへん」と繰り返しながら、ねんねこをがっしり結わえ、川の中にドボンと飛び降りると、膝までの水の中を大橋のほうへざぶざぶ走って行った。おんぎやあ、おんぎやあ。淳子の声が遠ざかっていく。サヨは、橋へと向かうミツの後ろ姿を見ながら祈った。温泉寺の観音さんよ。どうか、ミツと、淳子を、逃がしてやってくんねえ。観音さんよ、これまであんたを信じてきたが、もし働かざるに働いてこの街を繁盛させてきた女ばかりを見殺しにすんなら、わしは許さねえ。ミツよ、淳子よ、女のお前らが逃げられぬわけはねえ。それくらいのこと、観音さんは、わかってくんなる。さあ、泣け、泣け、淳子。大声で泣きながら、あの橋を渡れ。そしてな、無事に助かったお前はどんどん大きゆうなって、いつか大人になる。お前のばあちゃんも、女が好きなだけ泣けるのは赤子のうちだけだと言いよったが、それは大間違いじゃ。淳子よ。どうにも我慢でけんことがあれば、そのときは思う存分泣けばエエ。泣け、泣け。嫌なときは嫌じゃというて泣け。わしが流せんかった涙、淳子。全部お前にくれてやるだ。ただしな、お前が泣くのは悲しいときゃない、苦しいときゃない、くやしうきに泣くんだけ、腹の立ったときに泣くんだけ。それは、わがままではないだ。お前が、お前らしゆう生きるために泣くんだけ。涙を力こぶしに変えて、生きていくんだでな。

サヨが力いっぱい念じると、瞼の裏でミツと淳子に乗せた橋がぐんぐんのびて、円山川の向こうまで続いていくのが見えた。サヨも、ふたりを追ってその橋を駆け昇れそうな気がした瞬間、
—どこへ行ってもどんづまりじゃけえ。

いつか、あの客の男が言った言葉がサヨの頭の中にこだました。そのとき温泉街にいつせいに五本の火柱がたち、サヨの目の前を真っ赤に染めた。一瞬の炎を見たのを最期に、サヨは腹を両手で抱えたまま、くるりくるりと真っ暗な土のなかに落ちて行った。

△終わり▽

(注)「ご新造さん…若女将の事。」

【参考文献】

「城崎物語」(神戸新聞但馬総局編)
「石田松太郎手記」

※作品の著作権は作者に帰属します。無断での上演・掲載・配布は固くお断り申し上げます